

鹿児島県における音楽を通した子育て支援からみえる課題

A Problem of the Child Care Support Through the Music Activity in Kagoshima

中村礼香・丸田愛子

Ayaka Nakamura, Aiko Maruta

鹿児島女子短期大学

抄録：鹿児島県における子育て支援講座のニーズを把握し、子育て支援事業の一環として実施された音楽活動講座の実践から、音楽を通した子育て支援の実際と課題を整理することで、今後の子育て支援講座の在り方について考察することが本研究の目的である。

子育て支援講座におけるニーズ調査では、親子参加講座の希望が最も多いことがわかり、触れ合い遊びのニーズが高いことが分かった。音楽講座についてはその実際を明らかにし、調査をする中でリトミックが受け入れられやすいことが分かった。一方で、実践者としての省察的な考察として、対象年齢を明確にした講座内容を設定することの重要性が示唆された。

Key words：子育て支援、音楽活動講座、保護者のニーズ

1. はじめに

わが国では子育て支援が問われ、20年以上が経過した。政府が少子化問題に取り組み始めた1990年以降、子育て支援に関する施策が策定され、その後、社会の変容と共に子育て支援の在り方も多様化してきた。今では、保育所・幼稚園のみならず、地域においても子育て支援事業が実施され、社会のニーズに添っている。

筆者らは、鹿児島県の短期大学の児童教育学科に所属し、乳幼児の保育・教育、幼稚園教諭及び保育士養成に携わっている。最近では、自治体等の外部団体も含め、単発的な子育て支援に関する講座の講師依頼をされることが多くなってきた。日頃より、子育て支援に関する問題意識をもって、講座に取り組むことを心がけている。一方で、活動を構成するにあたって、用意した内容と受講者の要望が一致しているかを把握できず、構成した内容が講座内容として妥当であるか、気がかりに思うようになってきた。相馬(2011)¹⁾は、「今後の子育て支援政策のさらなる拡充と子育て支援を支える支援提供者の果たす役割の重要性を予測し、子育て支援が実践される多様な領域について、その担い手が支援の提供という経験をどのように理解しているのかを把握することは、支援提供者のウェルビーイングや支援の質の確保という観点からも不可欠である」と述べている。今後も子育て支援講座が増していくことも踏まえ、子育て支援講座で望まれる活動内容と実施する活動内容を改めて

検討することは、子育て支援の質の向上につながると考える。

現在、鹿児島県における子育て支援講座は、多様に実施されている。本研究では、筆者らが実際に実践した音楽活動に関する講座を題材とすることで、実践者としての省察的な観点をも含めた考察ができ、専門性を活かした支援の可能性を探ることができると考える。また、鹿児島県で行われた本講座の実際を整理することは、鹿児島県の子育て支援講座の把握となり、さらには、よりよい子育て支援講座の実施に発展するものと考えている。今後、高い専門性と鹿児島に根差した子育て支援を通して、地域の発展に貢献していきたいと考える。

そこで、本研究では、まず鹿児島県における子育て支援講座のニーズを把握し、続いて子育て支援事業の一環として実施された音楽活動講座の実践から、音楽を通した子育て支援の実際と課題を整理することで、今後の子育て支援講座の在り方について考察することを目的とする。

2. 問題の概要

(1) 子育て支援

第一に子育て支援の必要性を考える。子どもは一人で生活することは不可能であり、養育者のみならず関わる全ての人による子育てを通して育つ。つまり、子育てという言葉自体に子育てを支援するという要素が含まれていると考

えられる。しかしあえて「子育て支援」という言葉が必要な社会背景に、現在の子育て家庭では、子育てが困難な状況になりやすいという要因が考えられる。これらの困難さは、経済的・時間的・心理的によるものがあり、複雑に絡み合っていると考える。理由として、養育者自身の生活経験が不足していることや子育て環境が孤立していることが影響していると思われ、更には、子育てに関心がないというケースも考えられる。

厚生労働省²⁾による子ども・子育て支援とは、「次代の社会を担う子ども一人ひとりの育ちを社会全体で応援するため、子育てにかかる経済的負担の軽減や安心して子育てができる環境整備のための施策など総合的な推進の実施」とされている。このことから、子育て支援とは、子ども及び養育者に対しての社会全体による支援と捉えることができる。つまり、安心して子どもを産み育てること、子どもの健全な発達を促すことのできる人的・物的環境を含めた社会をつくることを目的と考えられる。

現在では、保育所、幼稚園、地域子育てセンターを含め、様々な機関で多様な子育て支援が実施されており、それぞれの役割を果たしている。その支援の実際は大きく2つの観点からとらえることができる。まず、子どもと養育者を間接的に支える社会的制度が挙げられる。児童福祉の理念からみる子育ての責任では、児童福祉法第1条「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。2すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない。」第2条「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う。」とある。また、子ども・子育て支援法では、第二条「子ども・子育て支援は、父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有するという基本的認識の下に、家庭、学校、地域、職域その他の社会のあらゆる分野における全ての構成員が、各々の役割を果たすとともに、相互に協力して行われなければならない。」とある。また、子ども・子育て支援法では、第一条「この法律は、我が国における急速な少子化の進行並びに家庭及び地域を取り巻く環境の変化に鑑み、児童福祉法（昭和二十二年法律第百六十四号）その他の子どもに関する法律による施策と相まって、子ども・子育て支援給付その他の子ども及び子どもを養育している者に必要な支援を行い、もって一人一人の子どもが健やかに成長することができる社会の実現に寄与することを目的とする。」とある。つまり、子育ての責任は社会全体にあり、そのための社会制度を整えることは、子育て支援の重要な役割を果た

すと考えることができる。

次に、子ども及び養育者に対して、支援者が直接的に関わる支援が挙げられる。現在では、主に家庭と仕事の両立、育児相談、情報提供、世代間交流など、具体的な支援の取り組みがなされている。実施場所についても、保育施設、地域子育て支援センターや子育てサロン等多様化しつつある。子育て支援として機能し、多くの養育者を支える一方で、これらの支援については、課題も考えられる。その一つに、様々な環境要因により、支援が必要であっても、利用者が子育て支援に関心がない、または支援に戸惑いを感じる場合には、この直接的に関わる支援は成立しないことがあげられる。これら、支援を必要とする潜在的な家族をも支えることのできる子育て支援の在り方も今後、検討されていく必要があると思われる。

以上、子育て支援の実際を2つの観点から捉え、本研究では、後者の子ども及び養育者に対して、支援者が直接的に関わる支援についての立ち位置とし、子育てを支援のための目的をもった遊びや情報の提供に関する講座であることを明確にする。

(2) 子育て支援に関する政策

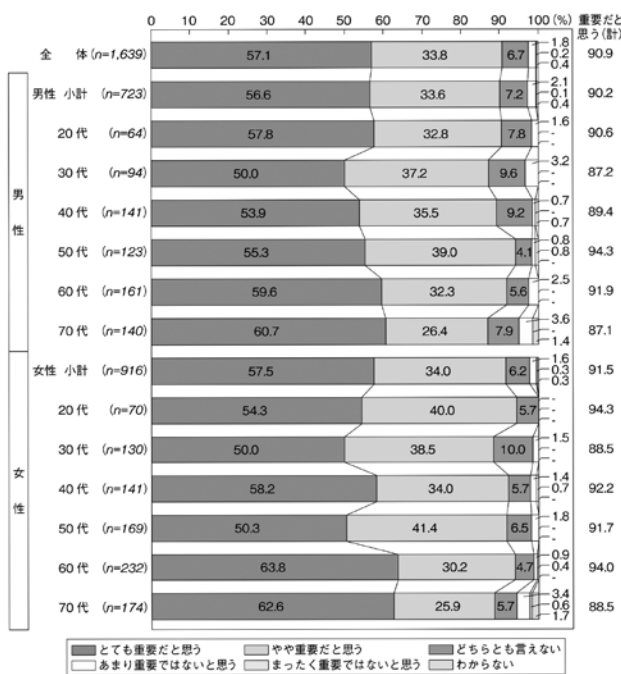
1989年合計特殊出生率が最低値の1.57を記録したことを受け、1994年「今後の子育て支援のための施策の基本的方向性について（エンゼルプラン）」が策定されたことが、子育て支援政策の始まりである。その後、1999年に「少子化対策推進基本方針（新エンゼルプラン）」が策定された。しかし少子化は進み、2003年「次世代育成支援対策推進法」が成立し、子育ての意義について明示された。さらに2010年「子ども・子育てビジョン」が策定され、少子化対策だけでなく、子ども・子育て支援への転換が図られ、社会全体で子育てを支えることが提示された。2012年「子ども・子育て関連3法」が成立し、これに伴う「子ども・子育て新制度」は2015年から本格施行となっている。このことは、子どもをもつ希望や子育てをしやすい社会の実現のために、国及び地域をもって子育てを支援することを示していると考えられる。

また、内閣府³⁾による平成26年版「家庭と地域における子育てに関する意識調査」では、子育てをする人にとっての地域の支えの必要性の調査がなされ、約9割が重要であると回答している。【図1】このことから分かるように、子育てを社会全体で支える意識的な子育て支援の政策の歴史はまだ浅いが、現在も子育て支援のニーズは高く、ニーズに対応すべく社会制度も変容してきていることが理解できる。

(3) 自治体による子育て支援事業

各自治体において現在、子育て支援事業として、検診、相談、保育所をはじめとする主な子育て支援事業、助成等の各事業を行っている。鹿児島市⁴⁾による『平成24年度子育て環境調査』では、子育ての実態を明らかにするために、子育て家庭への実態調査が行われている。調査においては、7割の家庭が子育てへの不安感や負担感を持っていることが明らかとなっている。また、不安や悩みを感じた時にあったらよいと思うことについては、一時的に子どもを預けるサービスが最も多く、次いで、様々な支援や心の支え、身近で気軽に相談できる施設、子育てについて気軽に相談できる仲間づくりが挙げられている。このことから、子育て支援活動のニーズを読み取ることができる。【図2】また現在実施されている主な子育て支援策として、「親子で参加できるイベント」「子育て中の親からの相談」など、6割を超える団体がっており、保育所・幼稚園や子育て支援施設等、多くの機関が実施している。今後も地域と行政機関、教育機関、法人等が連携してより充実した子育て支援が期待される。

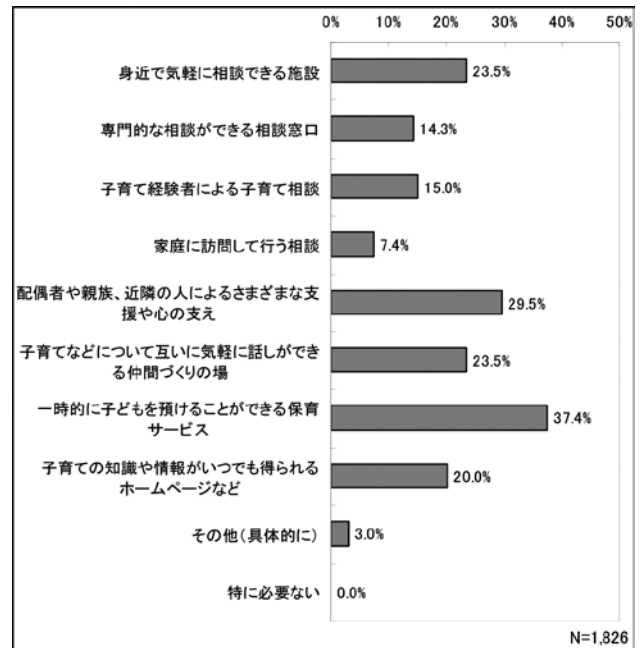
図1 『子育てをする人にとっての地域の支えの重要性』
＜単一回答＞（全体、性・年代別）



(注)『重要だと思う』は「とても重要だと思う」と「やや重要だと思う」の計

出典：内閣府『平成26年版少子化社会対策白書』20代から70代の男女3,000人を対象に実施。有効回収数1,639人（平成25年実施）

図2 不安や悩みを感じたときあったらいいと思ったこと（複数回答）



出典：鹿児島市『What! かごしま市子育ての実態～子育て環境調査概要版～』0歳から小3の子どもがいる家庭3,000世帯配布 有効回答数1,826世帯平成24年実施

(4) 子育て支援講座

近年、子育て支援に関する研究は、様々な観点から行われており増加している。それらの中ではまず、子育て支援に関する政策や動向から課題を分析するものが挙げられる。また、自治体や地域の子育て支援事業による子育て支援についても研究がなされ、教育・保育の現場や、地域のセンターにおける施設の利用状況、活動内容が調査され、実態やニーズ、課題が明らかにされている。

一方で、本研究の目的とする受講者が子育て支援講座に期待することと、子育て支援講座の活動内容の省察的検討に関する実践研究の報告はなされていない。また、井口(2010)⁵⁾松木(2013)⁶⁾らは、「いくつかの例外を除いて、子育て支援に携わる人々が自らによる支援の営みをどのように実践し、経験しているのかを明らかにする試みは殆ど行われていない。『支援・ケアの社会学』において、子育てというケアへの支援はほぼ看過されているのが現状である」ことを述べている。これらを受け、筆者らは、今回自らの子育て支援活動の実践を検証することで、今後の子育て支援講座の在り方についての方向性を見出すことができるのではないかと考える。受講者の要望と講座の中で教授したいことを明らかにし、実態に合った子育て支援を実践の中から説いていきたいと考える。

(5) 子育て支援講座における音楽活動

平成20年厚生労働省⁷⁾告示保育所保育指針(第3章保育の内容1保育のねらい及び内容(2)教育に関わるねらい及び内容オ表現)では、②保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。⑧音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。と書かれている。また、文部科学省⁸⁾告示の幼稚園教育要領(第2章ねらい及び内容 表現)では、2内容として、(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなど楽しさを味わうと書かれている。

保育所保育指針及び幼稚園教育要領は、乳幼児の保育および教育の指針・内容が示されており、乳幼児とその養育者を対象とした子育て支援活動内容のねらい及び内容の一つとして、十分に役割を果たすものとする。また、今回の子育て講座では、多くの音楽活動の中から、特にリトミックを主として構成された。その活動の中には歌唱、リズム打ち、手遊び歌等、保育所保育指針及び幼稚園教育要領に記載されている活動内容を網羅している。リトミックは身体活動を通して音楽能力を伸ばすことは当然ながら、想像力や創造力、集中力、個性、リズム感等様々な力を育むことができる。

現在、子育て支援講座の内容に関する体系的な要領や指針、課程等は見られない。よって、今回は音楽に関する講座に当たり、上記の内容を参考にして活動が構成されている。

3. 子育て支援講座におけるニーズ把握

3-1 研究方法

平成26年度4月から12月において、鹿児島県内で実施した子育て支援講座に参加した保護者を対象に、質問紙を配布しその場で回答を得、回収した。(121名中95名有効回収率78.5%)であった。質問項目は、対象者のニーズの把握が目的であること、また親子同席での実施であることを踏まえ、比較的取り組みやすいと考えられる複数回答法とした。なお、調査では順位法を用いた項目および自由記述も設定したが、有効回答数が得られなかったため、今回の考察対象としないものとする。また倫理的配慮として、調査の場で主催者および対象者に研究の目的を伝え了解得、実施された。

3-2 調査内容

子育て支援講座における講座内容のニーズ把握に当たり、「これからの子育て支援ではどのような活動が必要だと思わ

れますか。」と問いを設定し、選択項目を提示した。また、子育て支援講座の対象は、親子・母親・父親が考えられるため、親子参加、母親参加、父親参加の選択肢とそれぞれ希望する活動内容を選ぶ設定とした。選択項目については、現段階において子育て支援の講座内容の指針・要領等の基準となるものは見られないため、今回は、保育所保育指針及び幼稚園教育要領等やこれまでに実施されている子育て支援の内容を参考に、保育・教育に関連する事項を抽出し、対象者に分かり易い表現に置き換えた。選択項目は、次のとおりである。1, 季節に関するイベント 2, 子育て情報の提供 3, 他の参加者との座談会 4, 触れ合い遊び 5, 集団遊び 6, 自由遊び(遊び場提供) 7, 運動遊び 8, 音楽遊び 9, 造形遊び 10, 絵本の読み聞かせ 11, 食育活動 12, 子どもへの関わり方 13, 生活面(トイレ, 食事, 睡眠等)の援助の仕方 14, 個別発達相談 15, 子どもの健康 16, 専門家による講演 17, その他()

3-3 結果と考察 [図3]

活動内容の選択項目については、親子参加、母親参加、父親参加から選択され、1~16項目から選択がなされた。また17, その他については0(0%)であった。

結果として親子参加が多く表れ(65.2%)、「4触れ合い遊び」(50.5%)が最も多く選択された。また、母参加、父参加においても触れ合い遊びのニーズが多く見られた。触れ合い遊びについては、重要性がよく聞かれる一方で、明確な定義はなされていない。しかし、触れ合い遊びは、信頼感、人と関わる力、表現する力、学びの芽生えといった観点から育ちにつながると考えられ、子育て中の養育者の関心が高まりつつあると推察される。更に、触れ合い遊びは家庭において実践できる可能性を含んでいるにも関わらず、子育て支援講座での活動として希望されている結果から、触れ合い遊びの実践は養育者にとって難しいものとして捉えられているのではないと思われる。

次いで親子参加では「1季節に関するイベント」(37.8%)「7運動遊び」(30.5%)が挙げられる。「1季節に関するイベント」については、行事等の実施が主として考えられ、季節や文化の視点から、子どもに与えたいものとして捉えられていることが見える。また、季節に関するイベントは、当日限りの単発的な参加の在り方の場合もあり、気軽に参加できることが考えられる。

「7運動遊び」については、運動による発達への意識の高まりが考えられる。近年、厚生労働省および文部科学省による乳幼児または幼児の運動発達に関する調査・課題では、各運動機能の発達がやや遅くなっていること、また幼児期

における運動の意義が述べられており、今後重要性がさらに高まることが予想される。併せて、子どもの遊び場の減少や遊ぶ時間の確保の難しさなどに拠ることも考えられる。運動遊びから連想されるものとして、遊びのダイナミクさが考えられ、養育者に家庭で実現することが難しいとして捉えられているのではないかとと思われる。

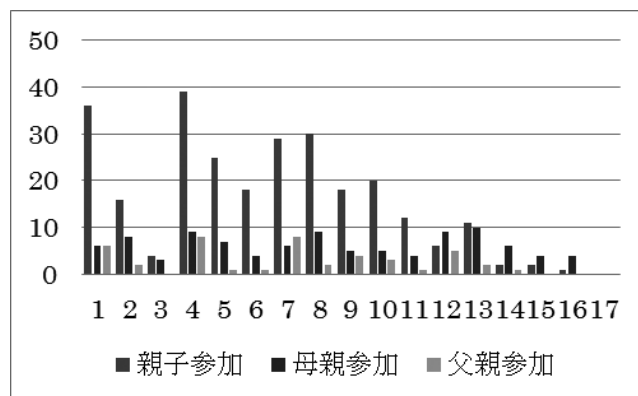
続いて「8, 音楽遊び」(31.5%)が挙げられる。岡本⁹⁾(1982)は、乳児と他者との共有として、リズムの共有、情動の共有、視線の共有、場の共有、対象の共有、シグナルの共有、テーマの共有、そして経験の共有の8種類の共有現象を示している。乳児が他者と共有する過程において、リズム、情動、視線をはじめとする音楽的要素が作用すると言え、音楽遊びの効果がうかがえる。

その他、「5, 集団遊び」(26.3%)「9, 造形遊び」(18.9%)「10, 絵本の読み聞かせ等」(21.0%)をはじめ諸項目が続く。母親参加・父親参加の項目についても、全体的に大きな差はみられない。ただし、母親参加では「13, 生活面(トイレ、食事、睡眠等)の援助の仕方」、「12, 子どもへの関わり方」のも含め、いずれもニーズが表れていることから、主たる養育者として関心の幅が広いことが読み取れる。

以上のことから、子育て支援講座におけるニーズについて考える。まず、当初筆者らは、個別の発達相談、生活面に関する援助の仕方、子育て情報の提供のニーズが多いこと予想していた。しかし、今回の調査では、親子遊びのニーズが高く、かつ遊びに関する項目(1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11)が上位を占めていた(84.3%)。このことは大変興味深く、遊びを通した育ちが認識されつつあることが予想される。一方で、単発的な講座の場合は、長期的な関わりや捉えができないため、発達、生活といった日常に関する事項がニーズの対象とならず、遊んでその場を楽しく過ごすことに関心が向いたことも考えられる。今回、いずれの項目も選択なされ、1~16の項目においてニーズがあることが分かった。

そこで今回は、筆者である中村自らが実践した音楽による子育て支援講座の実際と課題について省察的に考察することで、子育て支援講座の在り方を探っていきたい。

図3 子育て支援講座における活動内容ニーズ



1, 季節に関するイベント 2, 子育て情報の提供 3, 他の参加者との座談会 4, 触れ合い遊び 5, 集団遊び 6, 自由遊び(遊び場提供) 7, 運動遊び 8, 音楽遊び 9, 造形遊び 10, 絵本の読み聞かせ 11, 食育活動 12, 子どもへの関わり方 13, 生活面(トイレ, 食事, 睡眠等)の援助の仕方 14, 個別発達相談 15, 子どもの健康 16, 専門家による講演 17, その他()

4. 子育て支援講座における音楽活動

平成26年度に中村は計5件の子育て講座を依頼された。5件とも別々の会場で行われ、それぞれ1回のみの実施である。依頼内容はいずれも子育て支援講座と名前の付く講座であり、リトミックを行ってほしいという要望が2件、音楽遊びをしてほしいという要望が3件であった。音楽遊びという名前であっても、それらの主催者に了解を得て、リトミック活動を盛り込んだ。それぞれの活動内容について以下に記載する。実施者はいずれも中村である。また、活動内容は多少内容に違いはあるが大まかな流れは同じため、1件目のみ詳細に記載する。

①A幼稚園

実施日：平成26年6月

依頼内容：未就園児教室でリトミックや音楽活動を楽しみながら親子でスキンシップを図ってほしい

参加者：未就学園児の親子約40組(子どもは2歳から4歳までの約40名)

実施時間：50分間

活動内容：手遊び歌→リトミック→打楽器を使用したリズム打ち→歌唱活動

導入として手遊び歌を行った。「パンダ・うさぎ・コアラ」の一つひとつの動物の動作を子どもたちと確認後、歌に合わせてゆっくりのテンポから少しずつ早くしていった。また、ピカチュウの手遊び歌や、ディズニーの手遊び歌などを行った。

リトミック活動は、まず音楽の拍に合わせた歩行をから始めた。子どもたちには「お母さんと手をつないでお散歩に行くよ」という声掛けを行った。途中でピアノを止めると、音楽がなくなったことに気付いた子どもたちが動きを止める様子が見られ、何度かピアノを止めていると動きを止めるということが多くの親子でできるようになった。次に歩行の音楽の途中で、高音のクラスタの合図が聞こえたらお母さんに「たかいたかい」をしてもらう、低音の合図が聞こえたら座るといった活動をそれぞれ別々に行い、その活動の最後にはどちらの合図が入るかわからないという状況で高音と低音の合図をランダムに出し、子どもたちや保護者の集中力、判断力、即時反応力などを養う活動を行った。これらの活動が簡単にできている場合は、グリッサンドの合図を出し、歩く方向を変える活動まで行った。また、散歩中に「大きな栗の木があったよ」という声かけから「大きな栗の木の下で」の手遊び歌をテンポを変えて何度か行い、全身を使った歌唱活動を行った。

その後、ボールを使った活動に移行した。子どもたちが保護者とボールを転がし合っているのに合わせてピアノをグリッサンドで弾いた。そのピアノを2拍子のリズムの音楽に変えると、ボールをワンバウンドさせてやりとりする様子が見られ、音楽の違いを感じ取ったことが見受けられた。続いて数家族で円を作り、ボールを隣の人に渡していくという活動を行った。最初は手拍子に合わせてボールを隣の人に渡す練習を行い、慣れてきたところでそのテンポに合わせて「夢をかなえてドラえもん」を中村がピアノで弾き始めると歌を歌いながらボールを回す子どもたちもいた。小学生や5歳児など年齢が比較的高い子どもたちが参加している活動の時は、歌の途中で「反対」というかけ声をかけ、ボールを逆回りに渡すという活動も取り入れた。

リトミック活動の最後は絵本「ぐりとぐら」を読みながら、登場人物になって動く活動を行った。例えばぐりとぐらが森で木の実を集める場面では、「よいしょ、よいしょ」というかけ声に合わせて地面から拾う真似をしてもらいそのリズムに合わせて低音で2拍子の音楽を弾いた。また「木の枝にたくさんどんぐりがなっているよ」と上の方にも注意を向け、高い木から取るという動作を高音の2拍子の音楽に合わせて行った。料理道具を家まで取りに帰る場面では8分音符で音楽を弾きそれに合わせて走る、大きなフライパンを引きずる場面では低音の2分音符で音楽を弾く、動物がたくさん出てくる場面では、うさぎやぞう、蛇をイメージできる音楽を弾き動物を表現するというように情景がイメージできるような音楽を弾き、ストーリーと音楽を

組み合わせて実際に子どもたちに動いてもらった。

打楽器でのリズム打ちの活動は、子どもたちが喜ぶであろう動物の形をしたタンブリンやカスタネット、鈴を子どもたちに配布し、おもちゃのチャチャチャの「チャチャチャ」の部分で楽器を鳴らすことを練習したり、アイアイの曲に合わせてリズム打ちを真似してもらったりした。そのまま講座の最後の活動である歌唱活動に入り、自由に楽器を叩きながら童謡を中心におかあさんといっしょなどで歌われている「にじのむこうに」や、アナと雪の女王の「ありのままに」を子どもや保護者と一緒に歌った。

以上が大きな活動の流れである。

②B 幼稚園

実施日：平成26年6月

依頼内容：未就園児やその保護者にリトミック遊びをしてほしい

参加者：未就学園児の親子約40組（子どもは1歳から4歳までの約40名）

実施時間：60分間

活動内容：手遊び歌→リトミック→打楽器を使用したリズム打ち→歌唱活動

③C 短期大学

実施日：平成26年8月

依頼内容：音楽遊び

参加者：約30組の親子（子どもは0歳から7歳までの約50名）

実施時間：50分間

活動内容：手遊び歌→リトミック→指遊び→打楽器でのリズム打ち→歌唱活動

④D 市

実施日：平成26年11月

依頼内容：歌って、音楽を聴いて、身体を動かして親子のスキンシップを図ってほしい

参加者：約20組の親子（子どもは0歳から14歳までの約30名）

実施時間：1時間55分

活動内容：手遊び歌→リトミック→手作り楽器製作活動→歌唱活動→フルート演奏鑑賞

⑤E 市

実施日：平成26年11月

依頼内容：親子の音楽遊びを通した子育て支援をしてほしい

参加者：約10組の親子（子どもは0歳から7歳までの約10名）

実施時間：2時間10分

活動内容：手遊び歌→リトミック→手作り楽器製作活動→歌唱活動→フルート演奏鑑賞

D市とE市の活動では、A幼稚園、B幼稚園、C短期大学では行わなかった手作り楽器の活動を取り入れた。これはボランティアで参加した学生に協力を仰いだ。マラカスやギロ、でんでん太鼓、鈴、カスタネットといったペットボトルや紙皿、段ボールなど身近な物で作ることのできる楽器の大まかな形を事前に製作しておき、子どもたちには飾り付けや最後の仕上げをしてもらうようにした。また、この講座は約2時間という長時間に渡った設定であったため、子どもたちが疲れすぎないようにすることを考え、最後の30分は中村がフルートを演奏し鑑賞の時間を取った。音楽活動の中でも静と動の区別をつけ、メリハリのある内容になるよう工夫した。

A幼稚園、B幼稚園、C短期大学では時間が約60分であったので、リトミック活動を35分ほど行い、手遊び歌や歌唱活動で15分ほど時間を取った。一方D市とE市は約2時間と時間が長かったため、手作り楽器を製作する活動に30分程度時間をかけた。水分補給のための休憩などは適宜取っている。また子どもを連れて生演奏を聴きに行く機会がないという保護者の声もあり、中村がフルートを演奏する時間も取った。

子育て支援における音楽活動の位置づけが筆者自身わからず、手探り状態であった。子育て支援については幅広い解釈がある。そこで筆者は、どのような位置づけで子育て支援講座を行うべきか、厚生労働省のホームページを参考に調査した。その結果、音楽活動は地域子育て支援拠点事業の中の「交流の場の提供・交流促進」「子育て・子育て支援に関する講習等」に当てはまるのではないかと考えた。それらを踏まえ、活動内容として親子の触れ合いだけではなく、他の家族と交流できる機会を作る活動となるように企図した結果、子どもが伸び伸びと動くことができ、且つコミュニケーション能力を養うことができるリトミックを主な活動として行った。リトミックは音楽を使って子どもたちの情操教育、音楽教育を行うものである。親子や友達同士で行うことでコミュニケーション能力を高めたり、想像力、創造力、個性、表現力、集中力、判断力、記憶力、思考力、聴く力などを養うことができる。これらのリトミッ

クの教育的意義については講座の最初に保護者に簡単な説明を行った。

5. 質問紙調査概要

5-1 調査方法

中村が講師を務めた5件の子育て講座参加の保護者を対象とし、講座終了後に質問紙調査を行った。20代から4代の参加保護者約140名中127名（回収率約91%）からの回答が得られた。保護者や主催者側には研究として質問紙調査の結果を使用することの同意は得ている。

5-2 調査内容

講座の主要活動としてリトミックを行ったため、リトミックについての質問と、音楽を通してできる子育て支援について質問した。

- (1) リトミックを知っていたか
- (2) この講座は楽しかったか
- (3) 音楽を通した子育て支援にどのようなことを求めるか

5-3 調査結果

保護者と子どもの年代、年齢の分布はそれぞれ次の通りである。詳細は表1・表2に示している。

保護者は20代が20名（15.7%）、30代が80名（63.0%）、40代が27名（21.3%）であった。子どもの参加者は2歳児が53名（31.9%）、3歳児が50名（30.1%）と最も多く約6割を占めている。ただし、これはA幼稚園とB幼稚園の参加者が2歳児3歳児がほとんどだったためであり、D市では0歳から14歳までの幅広い年齢層の子どもたちが参加した中で7歳児が6名（20.7%）と最も多く、E市では0歳児から7歳児までがそれぞれほぼ同じ人数が参加していた。低年齢の子どもたちが中心であるが、兄弟として上の子を連れて来られる方、0歳児を抱っこされながら参加される方も見受けられた。

「リトミックについて知っていましたか」という質問に対し、「よく知っている」は55名（43.3%）、「名前だけ知っていた」は56名（44.1%）、「全く知らなかった」が16名（12.6%）となり、回答者127名中111名（87.4%）がリトミックを名前だけでも知っているという結果が得られた（図4）。

一方比較のため平成26年7月に本学の音楽Ⅲ受講者である2年生211名に同じ質問をしたところ、73名（34.6%）の学生がリトミックという言葉を知ることがなく、120名（56.9%）は名前だけ知っていた（図5）。その理由として多くが「他の授業でリトミックという名前を聞いた」という

回答であり、よく知っていると答えた18名(8.5%)の学生は「実習先の幼稚園や保育所で子どもたちと一緒に経験した」という回答であった。幼児教育に1年後に携わる学生たちにはあまりリトミックが認知されていないことがわかった。

保護者で「よく知っている」と回答があった中で主な理由として「学生時代に習った」が4名、「子どもの習い事」が18名、「子育てサークルで体験した」が11名、「本やテレビで知った」が4名、「保育所や幼稚園でやっている」が2名と、子どもの習い事や子育てサークルなどで実際に体験されている方が多いことがわかった。

「この講座を体験して楽しかったですか」という質問に対し、「とても楽しかった」が86名(67.7%)、「まあまあ楽しかった」が39名(30.7%)、「あまり楽しくなかった」が2名(1.6%)、「全く楽しくなかった」が0名という結果になり、98.4%の方は楽しんでくれたという結果になった(図6)。自由記述欄に感想を記載されたものをいくつか紹介する。「子どもが楽しそうに活動している様子を見て親も楽しくなった」「絵本を使ってもリトミックができるのが楽しくて勉強になった」「フルート演奏に癒やされた」「子どもと一緒にリズムに合わせて身体を動かすということはなかなかないので楽しかった」「親子で音遊びができて楽しかった」「子どもたちがとても喜んで遊ぶのを見て驚いた。こういう遊びに気付いていなかったので勉強になった」「親子の触れ合いができた」「音楽に合わせて歌ったり、動いたり普段なかなかできないことなのでよかった」という肯定的な意見がほとんどであった。当然のことながら否定的な感想もあったが、それについては考察で述べる。

最後に筆者が最も知りたかった、「音楽を通した子育て支援にどのようなことを求めますか」(複数回答可)という質問を行った。選択肢として

- (1) 子どものための歌をたくさん知りたい
- (2) 子どもと一緒に歌を歌う機会がほしい
- (3) リトミックのような身体活動を通した音楽遊びがしたい
- (4) 生演奏を聴かせる機会がほしい
- (5) その他

を挙げた。現在学生たちを指導していると保育者として知っていてほしい幼児曲を知らないことに度々驚かせられることがある。母親に歌ってもらったことがないかと尋ねても「ない」と答える学生が多い。このことから、子どもたちに歌を歌ってあげる保護者が少なくなっているのではないか、テレビで歌を覚えさせる家庭が多いのではない

かという危惧があり、(1)の子どものための歌を知りたい、もしくは(2)の子どもと一緒に歌を歌う機会がほしいという回答が多いのではないかと予想していた。しかし、集計をしてみると、「リトミックのような身体活動を通した音楽遊びがしたい」が95名(74.8%)と最も高く、次いで「生演奏を聴かせる機会がほしい」が66名(52.0%)、「子どもと一緒に歌う機会がほしい」が40名(31.5%)、「子どものための歌をたくさん知りたい」が37名(29.1%)となり、圧倒的にリトミックを求める回答が多かった(図7)。その他の回答として、1名から「楽器に触れさせる機会がほしい」という意見も聞かれた。筆者がピアノを弾いていると、横から一緒にピアノを鳴らす子どもが毎回いる。ピアノと一緒に弾いたり、ギターなどを触ったりするような活動も今後取り入れることを検討したい。A幼稚園、B幼稚園、C短期大学では生演奏を静かに聴くという活動は取り入れなかったが、講座終了毎に質問紙調査の集計を行っているところと予想以上に「生演奏を聴かせる機会がほしい」という回答が多かったことから、D市とE市での講座にフルートの生演奏を取り入れた。

5-4 考察

まず活動内容を考案する上で、講習会によっては受講者の年齢が直前まで確定せずプログラムを作成することに困難を極めることがあった。低年齢の子どもを想定して活動プログラムを組み、年齢の高い子どもたちを考慮することができなかったことを反省している。ただし、実践中に少し難易度の高い活動を臨機応変に挿入することがあったが、質問紙調査の感想の蘭に「2歳児には難しい活動があった」「活動のテンポが速かったのもう少しゆっくりでもよかった」「他の子ができている活動が自分の子はできなくて残念だった」「立ったり座ったりという活動が多く疲れた」といった意見が聞かれた。今年度は筆者にとって初めて子育て講座の仕事を引き受け、どの年齢を中心に考えたら良いかわからず手探り状態であった。年齢の制限をしたいと考える筆者と、少しでも子どもたちを集めたいという主催者側の意見が一致せず、参加希望の子どもたちをすべて受け入れたために起こった問題である。今後は活動内容を考える上で、はっきりと対象年齢を設定し、主催者側と意思疎通を行い、それに応じた指導内容を考案することを課題としたい。音楽を通した子育て支援に対する知識がないまま仕事を引き受けたことは否めない。しかし、質問紙調査を通して、子育て支援としてリトミックは受け入れられやすいと感じた。それは、「親子の触れ合いができた」「子どもが楽しんでいる姿を見られたことが嬉しい」という意見が

多くみられ、「リトミックのような身体活動を通した音楽遊びがしたい」という意見が約75%を占めたことに因る。家庭ではこのような集団や身体活動を伴った音楽遊びをすることは難しい。子どもたちは身体を動かすことが大好きである。リトミックは子どもたちにとっては遊びと感じられる活動であり、指導者側としては教育的、音楽的な目的をもって活動を行っていることが保護者に好意的に受け取られたのだと感じた。

今後子育て支援講座をさせていただく機会があるならば、子どもも保護者も楽しむことができ、且つ保護者がリラックスして息抜きになったと感じることができるような活動



写真1 手作り楽器活動の様子



写真2 手遊び歌活動の様子

を考案したい。

6. 今後の課題

今回は音楽活動講座のみを研究の対象としたが、今後は様々な分野の子育て支援講座に対する調査を行い、保護者のニーズを把握し、鹿児島における地域に根ざした子育て支援講座のあり方について理解を深めていきたい。

また、1, 2年後には保育者になる学生に対して、授業を通じて鹿児島の子育て家族が求めていることを伝え、現場で子育て支援に関わる際に役立つ知識を持った保育者を育てたいと考えている。

質問紙調査結果

表1 講座参加保護者の年代別分布

20代	20名	15.7%
30代	80名	63.0%
40代	27名	21.3%
計	127名	100.0%

表2 講座参加子どもの年齢別分布

0歳	3名	1.8%
1歳	13名	7.8%
2歳	53名	31.9%
3歳	50名	30.1%
4歳	20名	12.0%
5歳	7名	4.2%
6歳	6名	3.6%
7歳	10名	6.0%
8歳	1名	0.6%
9歳	1名	0.6%
10歳	1名	0.6%
11歳	0名	0.0%
12歳	0名	0.0%
13歳	0名	0.0%
14歳	1名	0.6%
計	166名	100.0%

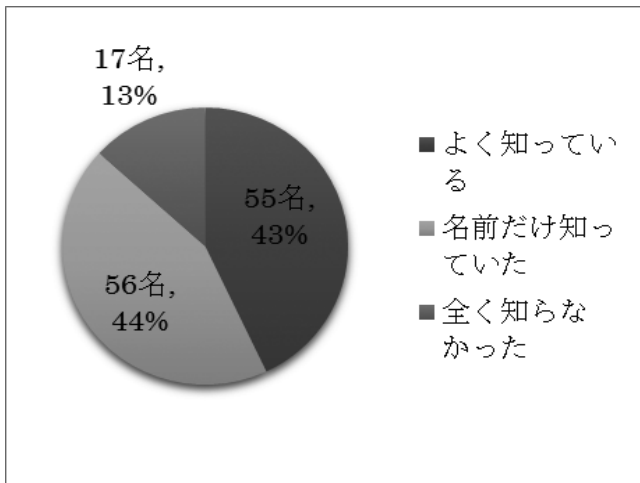


図4 講座参加者のリトミック認知度

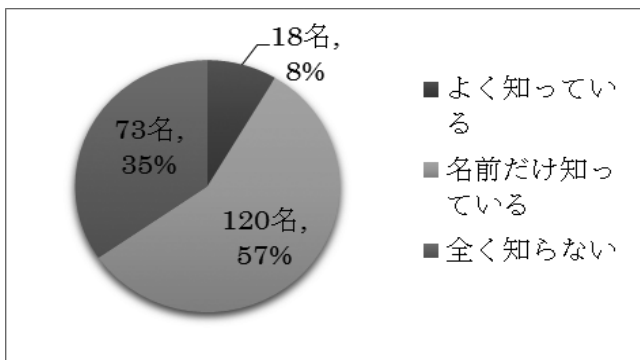


図5 本学学生のリトミック認知度

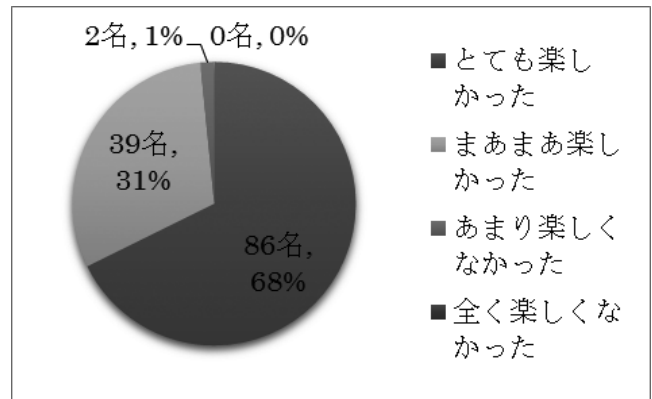


図6 講座を体験した感想の分布

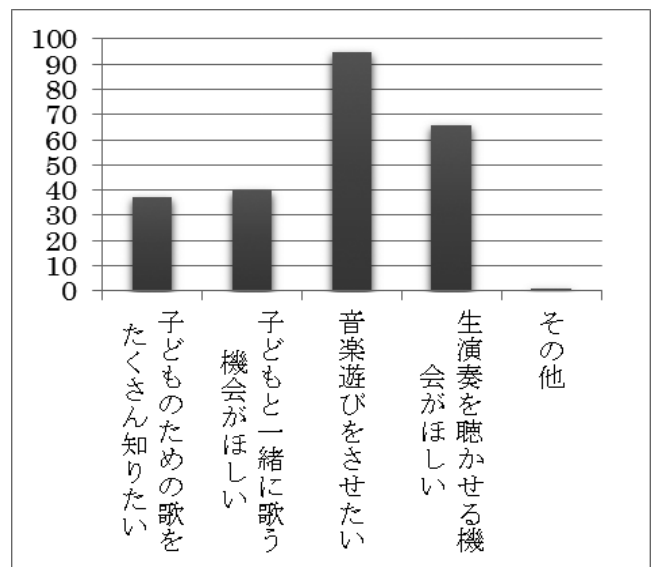


図7 音楽を通じた子育て支援に求めること

引用文献

- 1) 相馬直子：『子育ての社会化』論の系譜と本研究プロジェクトの目的 生協総研レポート66：1-16,2004
- 2) 厚生労働省：子ども・子育て支援 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/2012
- 3) 内閣府：『少子化社会対策白書』 p 15-20 日経印刷株式会社, 2014
- 4) 鹿児島市：『What! かがしま市子育ての実態～子育て環境調査概要版～』2012 P1-2
- 5) 井口高志：支援・ケアの社会学と家族研究—ケアの「社会化」をめぐる研究を中心に—家族社会学研究 Vol. 22 (2010) No. 2 P 165-176, 2010
- 6) 松木洋人：子育て支援の社会学—社会化のジレンマと家族の変容—新泉社2013
- 7) 厚生労働省：保育所保育指針<平成20年告示>
- 8) 文部科学省：幼稚園教育要領<平成20年告示>
- 9) 岡本夏木：『子どもとことば』岩波書店 1982

参考文献

- 1) 文部科学省：幼児期運動指針2012 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
- 2) 厚生労働省：平成22年乳幼児身体発育調査2014 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000042861.html>
- 3) 遠藤晶・江原千恵・松山由美子：ふれあい遊びにおける双方向性～手をつなぐ行為に着目して～ 武庫川女子大学大学院 教育学研究論集 第6号 2011

(平成27年1月28日 受理)